

補論 伝統的スポーツ

佐多町は大隅半島の最南端に位置し、太平洋と錦港湾に接した風光明媚な土地柄である。そして、南下した諸々の文化が集積した地域として、その特異性をみせてくれるであろう。また、舟で北上した文化が、最初に上陸した可能性も捨てきれない。

ところで、佐多町に限らずその土地その土地に根ざした伝統文化としてのスポーツの理解の仕方をまず述べることにしたい。まず、「伝統スポーツ」という用語の説明からすると、少なくとも明治以前にまでさかのぼれる可能性を持つことを第一の条件とする。さらに、「スポーツ」の用語説明をすると、当然ながら外来語であるが、その語源は中世ロマンス語に由来しているといわれ、運ぶ、持ち去るの意味で使用されていた。その後16世紀ごろにイギリスで今日使用されている *s p o r t* という言葉が登場し、幅広い意味付けがなされて定着するようになった。即ち、「慰み、気晴らし、気分転換、好色のあそび、愛の交際」から「遊戯・競争・肉体的鍛練の要素をふくむ運動の総称」として意味付けされ使用されている。

次に、スポーツの発生や起源について考える場合、スポーツ技術に着目しなければならない。すなわち、スポーツ技術は初期の段階において、生業形態と未分化の状態にあった。狩猟民における狩猟は、ひとつの生産型態であり、したがって、狩猟具（弓、槍、石等）は生産手段である。このような生産手段を本来の目的から分離し、娯楽性や競争性を強調するようになって、実用術としての狩猟技術がスポーツとして純化されて来たのである。

また、初期的スポーツに内包されていた、宗教的性格に関しても留意しなければならない。「古代オリンピック」の起源説においても、葬送儀礼としての説が出されるほどである。人々が農耕段階に入ると、狩猟段階にみられる活動範囲も、活発な身体活動も制限されるようになる。定住生活が一般的になると、生産物の成育に人々の関心が注がれるようになるが、自然現象に対応する方法を、今日ほど持ち合わせていなかった。いきおい、超自然的存在（神）に頼らざるえなく、そこに宗教観念が登場することになる。そして、その年や、農作物の出来、不出来を卜占によって予め認知しようと試みたのである。その方法はさまざまであるが、とりわけここで問題にするのが、その勝敗で善悪や豊凶などを判断しようとするスポーツである。

佐多町のいたるところで行われている伝承スポーツは、十五夜綱引とそれに付随する相撲である。十五夜綱引は、旧暦の八月十五日の夜に行われるのが本来のありかたであった。今日においてもその日に行っているところが多いが、他の所では十五夜に近い土・日曜日に行うようになって来ている。

本報告書では、今まで調査された報告を、伝承スポーツという項目で一括りにすること狙っている。したがって、私が調査したわけではないことをお断りしておく。また、文

末に出典番号を明記しておく。

- | | | | | |
|-----|-------|------------|----------|-------|
| 文献① | 小野重朗著 | 「十五夜綱引の研究」 | 慶友社 | 昭和47年 |
| 文献② | 下野敏見編 | 「佐多町の民俗」 | 佐多町教育委員会 | 平成7年 |
| 文献③ | 下野敏見編 | 「佐多町の民具」 | 佐多町教育委員会 | 平成7年 |

第1節 佐多町の十五夜綱引

1. 伊座敷 上ン園

海に沿って伊座敷の町があり、上ン園はその町に最も近い在の集落。七つの角（カド，薩摩制下で農家数戸の同族的集団）からできていた七つの姓の農家よりなる。八月に入ると子供組は綱の材料集めをはじめ，山からカヤ（マカヤとも言い，チガヤのこと）をとってき，家々からワラを貰い集める。十五日には青年が手伝って十五夜綱をなう。カヤを主にして，ワラを加えて，直径30センチほど，長さ50メートルほどの大きいもの。頭部に引綱がつき，脇からも縄をつけて引くように作る。これと並行して，子供たちだけでオツナ（御綱）をなう。ワラだけの綱で，これには近くの田から稲の穂のついた株を根こぎにしてきてないこむ。オ綱は直径10センチ，長さ3メートルほどのもの。二種の綱ができると，十五夜綱を輪にして巻き上げ，その上にオ綱も巻いて載せる。子供と青年が集まって，綱に神酒を注いで拝む。それからオ綱は近くの大きな松の木の月のよくさす枝に蛇が巻きついているように巻きつけておく。一方，青年は集落と水田とをとり囲むように巡っている道の途中に，十三本の長さ2メートルの太いダンクッ（大杭）を打ち込んでおく。月が昇ってこの一帯を照らすようになると，子供と青年は集まって十五夜綱を引きのぼし，子供たちは引綱を引いてこの杭の打ってある大通りを掛け声勇ましく，木遣歌をうたいながら引いて進む。青年や壮年は綱の後からついてきて，曲がり角などに打ち込んだ杭のところにくと，素早く綱の尻尾を杭に巻きつけてしまう。子供たちは力をこめて引っぱって，しまいに杭が抜けると先に進む。こうして十三本の杭が全部抜かれて，道を一巡して終わる。これが十五夜綱引の最も重要な行事と言われている。この後で綱引も行う。子供と青年と，また集落を上下に分けるなどして引き合う。途中で綱が切れると，切れただけを引いていって川に捨てる。普通には，旧九月十三夜（これをこの地方では小十五夜という）には綱引はしないが，十五夜が雨天などで綱引ができなかったようなときには小十五夜綱引をする。小十五夜には，十五夜と同様に家々では庭先に木臼をおき，箕をのせ，笹を敷いて餅を入れ，オアカリ（油火かろうそく）を点して月に供える。（文献① 45～46頁）

2. 伊座敷 瀬戸山

伊座敷の町の背後の古い在の集落。十五夜綱引を行うが，十五夜が雨天であったとか，十五夜の一週間内に集落で葬式があったとかすると十五夜綱引の代わりに九月十三夜に小

十五夜綱引を行う。そうした時にも綱引のやり方には変わりはない。綱引は子供が中心になってやるが、十五夜の当日になると青年がのりだして主導権をとり上げたよう形になる。八月になると子供たちは山のカヤをとり、家々ワラを貰い集める。ワラは新ワラがいいが、ない家が多いので、まだ馬屋の上にあげない清いワラを貰う。綱作りは青年が手伝う。大綱を作るのと並行して子供たちだけでオ綱をなう。集落の田を回って田毎の稲の穂のでたものを一株ずつ抜いてきて、それだけでオ綱をないあげる。外に稲穂が垂れ出ている綱で大きさは直径10センチ、長さ2メートルほど、これを二重に巻いて、高い木の月のよく照らす枝に掛けておく。掛ける前に神酒を供え皆で拝む。十五夜綱の方はワラとカヤでない直径40センチ長さ50メートルほど。月が昇ると子供組全員は集まってこの大綱を引いて集落の中を回る。途中の所々に数人の青年や壮年の人が待っていて、走って通り抜けようとする大綱の尾をとらえて、大きな石や、電柱などに巻きつけて止める。これをシボリトリとかシボリトメといって、子供たちは十五、十六歳の若い青年の助けをかりてやっとこれをはずして進み、幾つかのシボリトリを切り抜けてきまった巡回の道を引いて回り終わる。その後で普通の綱引もおこなうが、十五夜綱引の中心はこの綱を引いて集落を回ることだという。(文献① 46～47頁)

3. 伊座敷 瀬戸山

綱は新藁でつくる。引き綱と別に月に上げる綱（オツキサアノツナ）も一緒に作る。以前は米の穂がついたまま練っていたのだが、戦後早期栽培になり現在は刈り取った後の穂（二穂米）でつくる。引き各家から一束ずつすぐっていない藁を集めて強度をますためにカヤを少量混ぜて作る。最近のカヤは混ぜない。引き綱の長さは十五尋から二十尋ぐらいで青年が杉の老木の枝に掛けて三人で左巻きにしめていった。その杉の木に月に上げる綱（オズナ）を掛ける。現在杉の木は枯れてしまったのでマテの木（瀬坂神社付近）に掛けている。

昔は道路で綱引をしていた。一方が負けそうになるとそこに加勢にいつて長い間引き合う。綱引きずりは十年以上前はあった。消防団、青年団がしていた。瀬戸山だけを駆け回る。

不幸が八月中にあると十五夜綱引はしない。そのときは、旧九月十三日、小十五夜をする。小十五夜があるときは旧八月十五日の綱引はない。綱引が終わったら切って土俵にして角力をとる。伊座敷の人がきて対抗戦でした。(文献② 267頁)

4. 馬籠 馬籠

山地よりの在の農集落。八月に入ると子供と青年は山に行ってカンネン（葛）をとり、カヤを引いて綱の材料を集める。ワラも集めるが主材料はカヤである。綱は大小二本作る。小さい方は長さ3メートルほどで、子供たちがカヤだけの三つねりで作り、田から取って

きた穂つきの稲をとろどころにないこむ。この綱をオツキサン（お月様）といい、輪に巻いて丸くなったものをきまっている松の高い枝に掛けておく。大綱の方はカンネンを芯にして、その外にワラとカヤを三つねりでないつける。小綱を掛ける松の大枝から垂らして練りあげる。長さ40メートルほど。これも松の枝に掛けておいて、月がでると枝から下ろして輪にして積みあげ、青年と子供が塩と米を綱にまいて供えてから引きだす。子供たちが大綱を引いて集落大通りを一周する。歌にくわしい集落の古老が木遣歌をうたい、子供たちはそれに唱和しながら綱を引く。青年が七、八人後からついてきて、前もって通りのあちこちに打ち込んである丸太の杭のところにくと素早く大綱の尾をこれに巻きつけて綱の進行をとめる。これは子供たちが早く通りすぎないようにするたといい、一息いれると杭に巻いた綱をゆるめて、また引っぱって進む。こして長い時間をかけて、集落を一周する。集落の人たちは道までで綱を引いて通る子供たちを励まして見物する。終わって簡単に普通の綱引も行う。雨天などで十五夜綱引のできなかった時は、九月十三夜の小十五夜綱引をすることがある。（文献① 47頁）

5. 馬籠 大泊

日本海の外洋に面した集落で、浜とよぶ漁業海運業の集落と、大久保とよぶ在の農業集落と、麓とよぶ旧郷土集落とにほぼ三分されている。十五夜綱引では浜は東組であり、在の大久保が西組となり、麓は元は綱引には加わらないものだった。綱の材料はカヤだけで、採集は青年と子供の役で、身よ清めてから山に行きカヤを引いて、束ねて負って帰る。カヤや綱は神聖なものとされていて跨いだりすることを禁じていた。綱を足で踏んだというので、大人が青年の集まりに断りに行くような事もあった。綱は小綱二本と大綱一本を作る。小綱はオ月綱、オ月様ノ綱といって長さ3メートルほど、カヤの左ないの綱で、それを集落の両端にある西と東との十五夜の神に一本ずつ供える。十五夜の神というのは十五夜に拝む神で、西の是一本のソテツの古木で、東のは大きな自然石で、十五夜以外の時に拝むことはない。小綱はその神の傍の木の枝に掛けておき、神酒を注ぎかけて拝む。ここには大綱も最後にもってきて供えることになる。大綱の方もカヤだけでなうもので直径30センチ、長さ50メートルほど。でき上がると輪状に巻いて神酒をそなえる。夕食後、月が昇ると浜に綱を運びだし、集落を前記のように東西にわけて綱につく。引く前に青年が音頭をとって綱引の歌をうたう。「十五夜ノ綱ハ、サンサ船ニ乗セテ、ハレバ、ヤーンサ、ハヨイ、ハイエー」といった歌である。歌い終わるのを合図に引きあう。集落の老若男女が勢一杯に引く。西方が勝つと農作物が豊作になり、東方が勝つと大漁になると行って負けぬように引く。なかなか勝負がつかず、最後には青年頭がでて鎌で綱の中央を切ってしまう。そこで西組、東組は切れた綱をそれぞれ引っぱって走りだし、自分の方の十五夜の神まで引いて行ってその前に綱を供える。どちらが早く供えるかで勝負するのだと言い氣勢をあげる。その後、角力を夜おそくまでとる。九月十三夜の十五夜には、家々で月に供え

物はするが綱引はしない。(文献① 47～48頁)

6. 浜尻

八月十五夜には、青年が一把ずつ集めてきた藁を、松の枝に輪を作って下げていた。直径1～2メートル程度の輪だった。青年たちが作って、月が出るときに懸けた。綱引の綱とは別に作った。綱引用の綱は藁だけで作った一抱え程あるようなもので、枝綱もつけていた。針山との境の川のところで、針山と浜尻との間で喧嘩のようなことをする。針山の人が綱を奪いに来るので、取られないようにしていた。(文献② 42頁)

7. 針山

十五夜は針山、浜尻が別にしていた。オツキサンといって、引く綱とは別に直径50センチメートルくらいの輪を作って公民館の前の木に懸けた。その日の夕方に作り、できあがったらすぐに懸けた。引く綱は枝綱をつけた。浜尻の人の綱引の最中にこちらが行って綱引をした。終わったら綱で土俵を相撲をした。(文献② 45頁)

8. 間泊

八月十五夜には青年が藁をもらってきて、公民館の木に懸けて直径15センチメートルくらいの綱を練った。出来上がると村落内を子供たちが引きずって回った。その後、浜に降りてとぐろの様に綱を巻いた。お供えはしない。また、子供たちが藁で直径1メートル弱の輪を作って、月の見晴らしのいいところに懸けていた。(文献② 46～47頁)

9. 辺塚

八月十五日に辺塚の浜で十五夜があった。昭和二十年代までは辺塚の稲は普通作であり、新米を炊いて十五夜の月に供えていた。この他に栗、御神酒等のお供えはしていなかった。辺塚の浜では青年団が綱をウッテ（練って）東西に分かれて綱引をしていた。綱はかんねん葛芯にして、真茅で練っていた。かんねん葛がないときは、竹で代用していた。小十五夜は九月十三日で、縁側に里芋とさつま芋を供えていた。綱引はないが、十五夜の時に綱引ができなかったときは、この日に綱引をしていた。(文献② 226頁)

10. 辺塚

綱引きは東と西の二組に分かれてする。西は中郷、中村、神の原で東は中村、打詰である。

綱作りは西組は今の山下旅館に大きな楠の木があって、その木に引っ掛けて作り、東組は中郷の海岸に生えていた大きな松に引っ掛けて作った。綱作りは東と西とに分かれて競争で作った。勝っても何にもなかった。綱作りは夕方五時頃から作り始め、一時間で作り

終わる。

綱は戦前二百名近くいた小学生が山からカヤをひいてきて竹（キンチク）を芯にしてつくった。その年に新しい米がとれるとその藁を混ぜた。カヤはそのまま使う。十五夜の綱引は、まず海岸に東と西に分かれてとぐろ状に巻いた綱をおく。それぞれ御祝酒を供える。海岸は今よりもずっときれいな砂浜であった。綱をおく場所は恵比寿様の所と反対方向にある。

御祝酒をあげている三十分間、人々は綱引きの準備をする。月が出てきたらとぐろ状に巻いた先端を東と西でお互いに引っ張ってきて真結びでくくる。くくるのは東と西の中心の人たちがした。くくり終わると二つのとぐろを引きのばして一本にして引き合う。雨が降ったら中止で小十五夜はしない。

各家では月の見える縁側に萩の花、ススキの穂をそなえる。おはぎも作って盆の上にそなえる。（文献② 272～273頁）

11. 辺塚 打詰

普通は旧八月十五日夜。この日に雨が降ったりして出来なかった時は、「小十五夜」といって旧九月十三夜に行うという。

子どもに限らず皆が協力してカヤをひいて集めてくる。綱にワラは使わない。というのは、ワラは牛小屋に保管してあり、キタナイのでお月さまにあげるのに失礼なるのだかだという。当日、綱を練る。以前は「十五夜石」と呼ばれる大きくて丸い石があり、その石に綱をとぐろ巻きにしておき、御神酒、米を供えていた。その石は舗装道路をつくった時に埋めてしまったという。石の前で綱引をした。この時、御弁当や焼酎を持って行って楽しんだものだという。相撲はしていなかったのではないか、ということだった。

家では升の中に炊いた御飯を入れてそれをミ（箕）にのせて、縁の先において月に供えた。また、十五夜がきたらイモができるので、それをホトケサンにあげたという。（文献③ 350頁）

12. 島泊

15才以下子供たちが、各家からカヤを一把ずつ集めてきて山からカズラを引いてきて綱を作った。カヤは打って使うがカズラは打たなかった。カズラは芯になる。現在はロープでしている。綱引は上と下に分かれてするが、他にも上海、下海、中海の分け方がある。これは運動会の時や村の仕事の時の分け方である。

綱の作り方は今の消防場の近くに大きな松の木があって、その枝にカズラ芯を五、六人で「ヨイ、サー。ヨイ、サー」と上げたり、下げたりして巻いていった。

綱の長さは片方15m、両方で30程mであった。片方につき十本程の「テ」という小さな綱をつけて多くの人が引けるようにしてある。綱は半分ずつ作って中央でくくる。綱引ず

りはしない。

夕方になると月供えるオ綱を橋の上に高く積み上げて塩と御祝酒をあげた。月がでると綱引がはじまる。

現在十五夜の綱を行事が終わったあと少しずつ自分の船に持って行って綱に錘と一緒にくくりつけて漁をすると魚がとれるといわれている。(文献② 270頁)

13. 島泊

7～14才の子ども達が1, 2週間位前から、学校がおわると山にカズラを採りにいって、川につけておく。それを前日に何十本か束にして、綱の芯を作る。一方親達はカヤをとりにつけていた。十五夜当日、子ども達は、大人のところにいって、「カヤをまいて下さい」と頼んで、カズラの芯にカヤをまいてもらって綱をつくる。出来上がったら、とぐろにまいて月に供えておく。14才のカシラの少年が呼びかけて人々が集まり、上下に分かれて3回位綱引をする。2～3日程かかって砂で土俵を作っておいたところに綱引で使った綱を丸く於いて相撲を青壮年がとる。

各家庭では団子、里芋、ススキを盆にのせて月の見える所に置いた。また、里芋や新米の御飯を相撲にそなえて、食べさせたりしたという。

島泊には「十五夜の神」と呼ばれる神様がおり、十五夜と正月6日の豆まきの時に子どもたちだけでおまいりする。お供え物などはしない。(文献③ 352頁)

13. 古里

綱作りは子供たちが各家から二把ずつもらってきて綱は藁で作る。カヤは使わない。天気が悪かったらしない。小十五夜(旧九月十三日)は昔はあった。月にあげる綱はなかった。綱引きずりもしない。

各家では神棚に里芋を料理したものを供える。(文献② 269頁)

14. 川田原

各家から藁を一束ずつもらってきて月に供える綱と引く綱の二つ作った。月にあげる綱をオツキサマの綱といった。

綱は村落の入口に大木があってそこに掛けた。七時から八時頃かけた。綱を引きあつたあとは角力をした。綱は夕方に練りはじめる。綱は木に掛けてつくる。川田原村落だけでする。青年団がつくる。綱は藁だけで新しい藁を使う。角力の土俵は綱引きで引き合った藁で丸く輪を作って角力をする。その翌日にその綱を売る。オツキサマの綱はそのままである。雨が降ったらない。小十五夜もしない。(文献② 272頁)

15. 外之浦

何日か前から暇な時にカヤを取ってきて、小川につけておく。綱を練るのは前日か当日。児童達が青年に教えてもらいながら、木の枝にかけて3人でよりあわせて練っていく。直径20センチ位の綱を作る。また、エビス様に供える綱と月に供える縄も練ってそれぞれ供える。

浜で二手に分かれて綱引きをした後、綱で土俵を作って、子供達が相撲をとる。十五夜行事がすむと、綱は浜に放置され、カライモの敷ワラや牛の餌用に人々が貰っていく。

各家庭の供え物は、団子、栗、里芋、ススキ、シイ（神木）などトコサア（トコンマエ）に供えたりした。青年の家庭では、里芋をたくさんたいて、軒先にかけておくと、勝手に貰っていかれたものだという。（文献③ 348頁）

16. 郡（上区）

各戸からワラをもらって青年たちが綱をねる。ワラが足りない時には子供たちがカラヒキに行く。出来たら、とぐろ状にまいておく。また、綱を丸くまいて月に見立てたものを大きなタブの木にかけます。綱引をした後、綱を丸めて土俵にして相撲をとる。この時、こっそり持ってきた川畑蜜柑をたべるのがたのしみだったという。供え物は団子、初物のカライモ、ハギ、ススキなど。お盆や小さな食台にのせてトコサマや縁側に。（文献③ 349頁）

17. 伊座敷（麓）

一カ月位前からワラ、カズラなどを集めて準備にかかり、青壮年の人たちが綱を練っていく。子どもは少し手伝う程度。直径7～8センチの綱を作り、とぐろ巻にしておいておく。綱に酒、塩を撒いて清め、カミサマにおがむ。それから道路で綱引を2、3回楽しむ。その後、広場で線を引いて子ども同士で相撲をとっていた。現在はロープで綱引だけをしたりする。

特に月に供え物をすることなく、煮しめ（野菜、魚、鶏などで）、赤飯、団子を作って食べることを楽しんだという。（文献③ 349頁）

18. 伊座敷（折山）

ワラを持ち寄って、青年団が直径30センチ位の綱を練る。また、大きな綱の輪を作って、十五夜の晩にきまった木にかけます。これをジュウゴヤサンという。綱引をした後相撲をとる。また、ジュウゴヤサンの前で食べ物などを持ち寄って、飲み食いする。使用後の綱は堆肥として利用される。（文献③ 351頁）

19. 間泊

旧暦の8月15日は十五夜である。その日に各家々から藁をもらって、青年が浜に高さ

1.5メートルの櫓を組んで、直径10センチの3本よりの藁だけの綱を2本練る。お月さんの見える屋根の上に、綱を3回巻いて束ねて紐で縛った綱を供え、綱の前に御神酒を供える。もう一本は相撲の土俵に使う。間泊には、綱引はない。

夜は男の子供だけの相撲をとる。ガラッパ相撲などで、夜遅くまで賑わう。
新米を炊いて、縁側の月の見えるところに、茶碗に山盛りいっぱい銀飯を月に供える。
だから、その日は銀飯（白米だけで炊いたご飯）が食べられる。（文献③ 272頁）

20. 竹之浦

青年が綱は練るが、綱引はない。現在もこの行事は行っている。
お月さんの綱を稲藁で練って、タカセと呼ばれる海岸の大木に巻き付けて月にあげる。縄は直径30センチ、長さ8尋の3本組の左廻いの綱を橋の下で練る。綱は供えたままおいておく。

相撲の土俵の綱も作り、海岸でガラッパ相撲をとる。土俵は無くなるまで、置いたままにしておく。土俵の綱の藁を牛に食べさせると縁起がよいと言って、村人が買いに来る。（文献③ 275頁）

21. 大泊

十五夜の綱は、茅に稲藁を少し混ぜて廻う左廻いの綱である。綱は神聖なもので、越えてはならない。もし越えてしまったら、青年にことわりに行く。茅だけで廻うのが本来であるが、現在は水稻の早期栽培が普及しているので、8月ではあるが稲藁があるので、混ぜた。

茅は十五夜の前々日に、婦人会と子供が山に取りに行く。青年は茅取りにはいかないで、綱廻いだけを担当する。現在では青年が少ないので、青年と壮年が力を合わせて廻う。茅は、婦人会の人たちが草刈りに行ったときに、茅を切らずに引き抜いて事前に準備しておいたが、今年は当日の朝に茅取りに行った。

大泊は東部の漁業中心の「浜」、西部の農業中心の「大久保」に分かれている。その他に麓があり、十五夜の時は、東と西に分かれる。

9月20日に、B & G 佐多海洋センターの前に櫓を組んで廻った。綱ができあがると塩と御神酒を供える。平成6年の綱の直径は12センチで、土俵の直径は350センチあった。月が昇ると綱は海岸に引き出して、東西に分かれて綱引きする。この時に青年が鉢巻きに襷を掛けて、「十五夜の綱は、さんさ船に乗せて、ハレバ ヤーンサ サノエー」と口説きを歌あげると、みんなが囃して引きはじめる。東の浜組が勝と豊漁で、西の大久保が勝と豊作であると言われている。

綱引きが終わると、中央から鉈で半分にきる。その切り口から3メートルの所から再び鉈で切断する。切断した綱は子供が東の十五夜の神と、西の十五夜の神に供える。この供

える早さを西と東が競争する。この時には、特別にお供えはしない。

東組の子供は、東部の浜の十五夜の神の石像に3メートルに切った綱をグルグル巻いて供える。供えたときに万歳をする。この時に反対の西組の子供が二人で見張りに行く。十五夜の神様は集落の東部の小高い所に、高さ90センチ、幅41センチの浮き彫りで、南の海の方を向いて立っている。向かって左側に石像、右側に円柱形の墓石が同じ方向を向いて立っている。東の方向に山があるので、西の十五夜の神より月の出が遅い。

西組の子供は、西部の大久保の十五夜の神の石像に3メートルに切った綱をグルグル巻いて供える。供えたときに万歳をする。この時に反対の東組の子供が二人で見張りに行く。西組の十五夜の神様はB & G 佐多海洋センターの西隣にあり、高さ38センチ、幅26センチ、奥行き10センチの浮き彫りの石像である。海岸の広場に立っているので、東の十五夜の神の所より早く月が出てくる。

残った2本の綱で海岸に土俵を作り、同じく東西に分かれて相撲をとる。

9月13日の十三夜はお供えだけで、綱引はない。(文献③ 292頁)

第2節 その他

1. カギ引き

御崎祭りの一環としておこなわれる。2月20日の近津宮神社で打植え祭りの時に、1メートル前後の先がカギ状になった股木を持った十人前後の男性が円形状になって、それであたかも鍬のように地面を打ち、耕す模擬行為をしたのちに互いの股木を引っ掛けあって、引き合うのである。勝敗を決するものでなく、単に引き合うだけである。(文献③ 436頁)

2月の初卯の稲牟禮神社の春祭(祈念祭)の時にも同様のカギ引きがおこなわれる。

このカギ引きを考える際に、参考になるのが鹿屋市上高隈町の中津神社で行われるカギ引きである。上下に二分して、自然木をそのまま切り倒し雌カギと雄カギに形状を整えて境内まで運ぶ。さまざまな行事がおこなわれ、いよいよカギ引きとなると、境内は熱気に満ち溢れる。三回勝負であるが、途中でカギが裂けることもあって、その時点で裂けたほうが敗者となる。もちろん、勝者には豊年が約束されると言われていて、人々は必死で引き合うのである。明らかに予祝儀礼であり、綱引の意義付けと同根である。

大隅半島には、春祭の一環としてカギ引きを行うところが多数あって、それも勝敗を決する場合が多い。なぜ、佐多町のカギ引きが単に引き合うだけで、勝敗を度外視しているのかを解く決定的な根拠はないが、どちらかが不利な結果を被るのを避ける意味で、勝敗を決しなくなったのかもしれない。神事相撲の中には、必ず引き分けにする勝敗の決し方があることから、それと同類とみなしてもよさそうである。

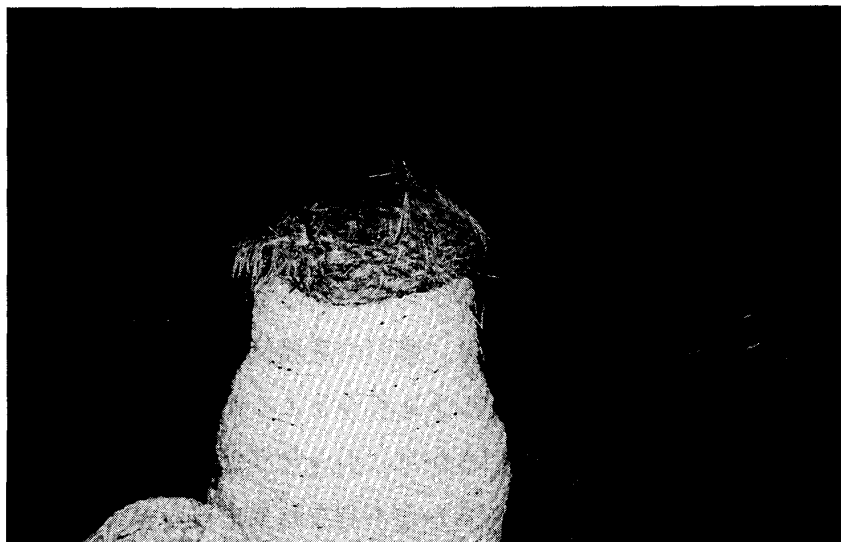
2. ハイギネン（ハイブシャ）

竹之浦では、旧暦一月二十三日にハイギネンという弓射をおこなう。床どんに供えた餅に敷いていたユエガミを集めて貼りわせる。それで的を作る。浜に出て、五尋くらい離れたところから、みんなで順番に弓で射る。誰かが真ん中にあてたら、貼りあわせたユエガミをみんなで分ける。それを、病気にならないようにと耳に挟む。（文献② 258頁）

（瀬戸口 照 夫）



上ノ園のオツナ（広報課上之園氏提供）



上ノ園のオツナと十五夜綱（同上）



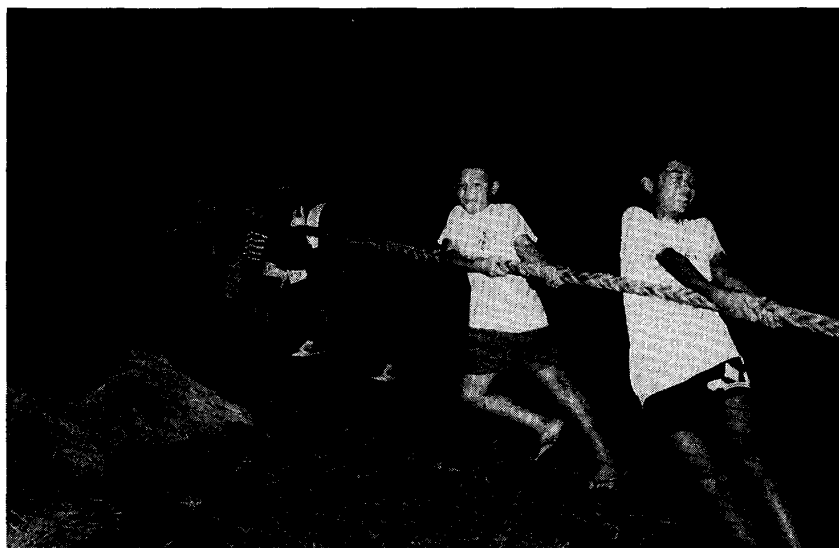
上ノ園の十五夜綱引情景（同前）



馬籠の十五夜綱（同上）



馬籠の十五夜相撲（同上）



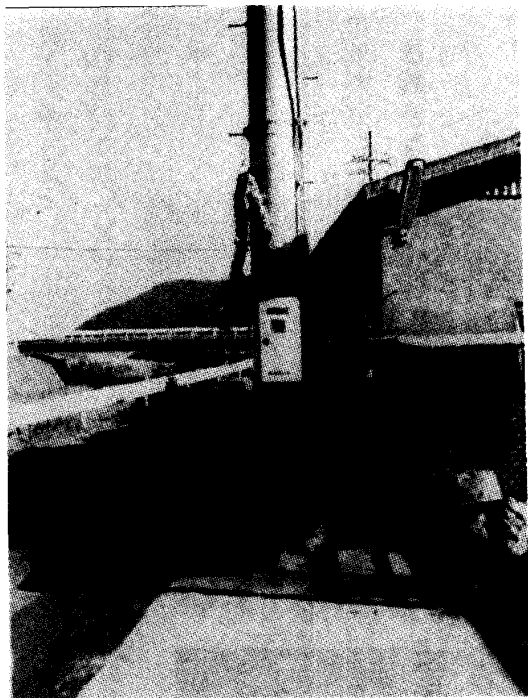
瀬戸山の綱引情景（同前）



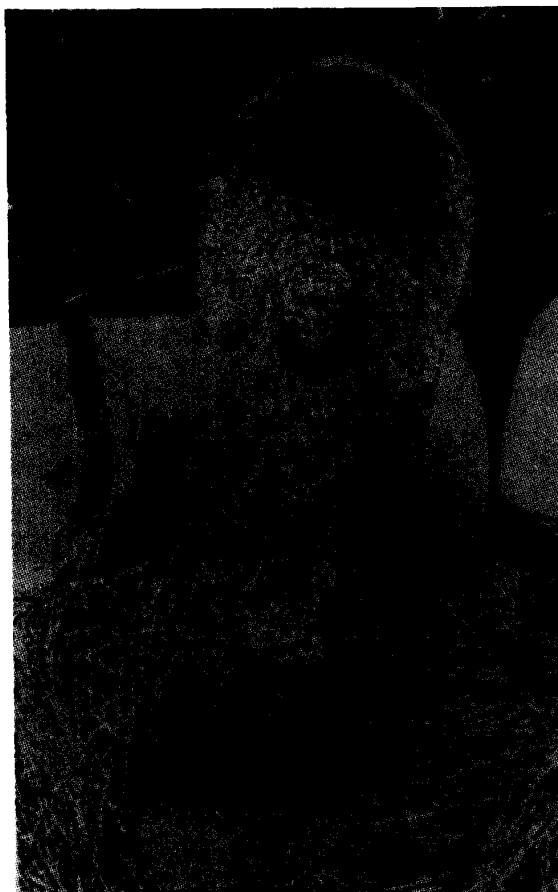
瀬戸山の十五夜相撲（同上）



川田代の十五夜相撲（同上）



坂元のアゲツナ（文献② 380頁）



大泊の大久保集落の十五夜神
（文献③ 297頁）



大泊の東の浜集落の十五夜神（文献③ 297頁）



竹の浦の月に供えられた十五夜網（文献③ 296頁）



近津宮神社でのカギ引き（広報課上之園氏提供）



鹿屋市中津神社のカギ引き